芝蘭会報
第178号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail:info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

②③ 退任あいさつ
芝蘭会評議員会・理事会
④ 支部だより　東京
マイコースプログラム海外留学レポート
⑤⑥ 校友会・KMS-FUNDだより
人事異動・会員訃報

臨床研究総合センター開所

先端医療研究を加速

京大医学部附属病院、部門統合

国際水準 新薬開発など効率的に

京都大学医学部附属病院では、臨床研究のさらなる体制強化をめざし、既存の３センター及び１部門を統合した「臨床研究総合センター」を開所し、去る４月15日にオープニングセレモニーを開催しました。

臨床研究総合センターのオープニングセレモニーで開所を喜ぶ関係者ら

難病で苦しむ人たちの治療に欠かせない革新的な医薬品、医療機器の開発。そのためにはさらなる臨床研究の進展が必要です。京都大学医学部附属病院（京大病院）では、これまで臨床研究の推進を目指したさまざまな取り組みを行ってきました。

そして２０１２年に、厚生労働省から関西で唯一「臨床研究中核病院」に選定されました。臨床研究中核病院とは、国際水準の臨床研究や、医師主導の治験を進める上での医療機関のネットワークの拠点となる病院です。全国５施設のうちの１施設に選ばれた京大病院では、臨床研究の体制を強化するため、２０１３年４月１日に「臨床研究総合センター」を開所しました。既にあった探索医療センター、治験管理センター、医学研究科ＥＢＭ研究センター、医療開発管理部を統合し、新たに誕生したセンターです。細分化された縦割りの組織ではなく、各部門の機能をまとめ一つの組織にすることによって、先端医療の臨床研究を加速し、新薬の開発を効率的に進めることが可能になります。

本来、日本では各大学や研究所で優れた基礎研究と企業による高度な開発研究が行われてきましたが、先端医療開発の分野では欧米諸国に立ち遅れています。その理由の一つが、研究を臨床応用化するためのシステムが整備されてこなかった点にあります。

今回京大病院が立ち上げた「臨床研究総合センター」は、日々の臨床や治験での成果を検証し、改善を目指して既存の医療の再評価を行うと同時に、新薬や新しい医療機器を生み出す創薬に取り組みます。そこには、医師はもちろんのこと、統計やデータ管理、そして医師と患者さんの間に立つＣＲＣ（治験コーディネーター）といった専門家を含むチームを作り、欧米並みのスピード感を持って臨床応用を進めていきます。さらに他の医療機関とのネットワークを築き、西日本の複数の大学病院と協働し、創薬のシーズを現実化する支援体制も作ります。日本の医療イノベーションの進展と世界に通用する医学エビデンスの構築に貢献し、難病に苦しむ患者へ一日も早い先進医療の提供を目指します。

あいさつする松本紘京大総長

あいさつする三嶋理晃京大病院長

ゲストに鳥越俊太郎氏 トークセッション熱く

「臨床研究総合センター」の開所にあたり、京大病院は２０１３年４月15日（月）、京都大学医学部芝蘭会館においてオープニングセレモニーを開催しました。

まず主催者を代表し、京都大学医学部附属病院三嶋理晃病院長からあいさつがありました。日本の臨床研究が欧米に立ち遅れている現状を鑑み「厚生労働省が臨床研究中核病院の構想を立てられたのは卓見だと思います」と語り、本センターがそのけん引となること、そして他大学の研究施設や企業と連携することの重要性について述べられました。

続いて京都大学 松本紘 総長が「大学を代表して、お祝いとお礼を申し上げます」とあいさつをされました。「京都大学には素晴らしい研究のシーズがあり、他大学や企業の研究所にもシーズがたくさんあります。それらをネットワークするこのセンターで新しい医療を開発し、一日でも早く難病に苦しむ人に提供できると期待しています」と述べられました。

次に来賓を代表し、厚生労働省医政局研究開発振興課山田雅信治験推進室長にご臨席賜り、原徳壽医政局長のご祝辞を代読、披露されました。その後は京大病院旧探索医療センター長から臨床研究総合センター長に就任された上本伸二副病院長から、本センターの概要と取り組みについて説明がありました。

続いてはジャーナリストの鳥越俊太郎氏をゲストに迎えてのトークセッションです。「臨床研究推進の必要性」をテーマに、本センターの川上浩司データサイエンス部長による進行で、熱のこもったトークが繰り広げられました。

４回の大腸がん手術を経験し、メニエール病を患う鳥越氏は「幾多の難病のメカニズムを解明し、治療法を見つけ出し、臨床研究によって一人でも多くの方を救っていただく、そういう期待が持てるんじゃないかと感じています」と、本センター開所への手応えを語ってくださいました。

閉会のあいさつは、臨床研究総合センター清水章副センター長・開発企画部長です。「統合のメリットを大いに活用し、発展させていきたいと考えています」と語り、「本日、鳥越さんのお話をうかがったことで、私たち医療者は改めて初心に戻り、本センターにおいて新しい医療の開発・改善に向かって邁進してまいります」と力強い決意の言葉で締めくくりました。

熱のこもったトークを繰り広げるジャーナリストの鳥越俊太郎氏（右）と川上浩司データサイエンス部長

平成24年度の受章者 春の叙勲

瑞宝中綬章

小泉　保（昭32年薬学科卒）
富山医科薬科大名誉教授

冨永 芳徳（昭43年卒）
元公立甲賀病院長

鍋島京大名誉教授に日本学士院賞

ヒト老化疾患予防に道筋

このたび、鍋島陽一京都大学名誉教授が第１０３回（平成25年）日本学士院賞を受賞した。日本学士院賞は、日本の学術賞としては最も権威ある賞で、学術上特に優れた研究業績をあげた研究者に授与される。授賞式は平成25年６月に東京で行われる予定。

受賞理由は、「Klotho family の発見とその分子機能の解析を基盤とした生体恒常性維持機構の研究」において、ヒトの老化によく似た症状を示すマウスの原因遺伝子としてクロトー（α-クロトー）を発見し、多彩な老化類似症状が一つの遺伝子の異常によって起こることを示し、次いで、α-クロトーがカルシウム濃度を一定に保つために働いていることを発見し、カルシウム恒常性維持機構の全体像の解明に大きく貢献した。

また、鍋島氏はα-クロトーによく似たβ-クロトー遺伝子を発見、胆汁酸の合成、コレステロール代謝におけるβ-クロトーの役割を解明した。

一方、同氏は、α-クロトー、β-クロトーが多様なタンパク質と結合する機構を解析し、タンパク間相互作用における糖鎖の新たな機能を解明した。さらにこの研究は、ヒトのクロトー遺伝子の研究、老化関連疾患の治療法の開発へと進展している。

カルシウム、胆汁酸、コレステロールは健康な体の維持と機能の制御に必須であり、鍋島氏の研究は、ヒト老化疾患の予防、治療法の開発、ひいては健康な老化の実現に道を開くものである。

鍋島陽一京大名誉教授

退任あいさつ

細菌学と免疫学の融合を求めて

京都大学大学院総合生存学館思修館専任特定教授　光山　正雄

本年3月末をもちまして、平成10年4月から15年間お世話になりました医学研究科・医学部（微生物感染症学）を定年退職いたしました。助手、講師、助教授を務めた母校九州大学細菌学、11年間の新潟大学細菌学教授、そして本学微生物感染症学教授としての15年間と、医学部卒業直後の3年間の臨床を除く都合37年間にわたる微生物学の研究と教育の職を全うすることができました。本学に赴任当初は知り合いも少なく心細い出発でしたが、飾らず気さくな医学研究科と芝蘭会の先生方のお蔭で本学にすんなりとなじむことができ、自分なりに納得いく日々を送ることができました。この間皆さまからたまわりましたご厚情に感謝し心よりお礼申し上げます。

京大卒ではない私にとっての本学のイメージは、単にわが国を代表する優れた伝統ある大学にとどまらず、他のどの大学とも違う学術研究への強い思い入れと個性ある実績、アカデミアの旗手としての気概あふれる大学というものでした。15年前京大医学研究科の一員となりました私にも次第に京大人としての自覚が芽生え、客観的に抱いてきた思いを自分のものとして実感しつつ勤務することができました。研究面では、細菌学と免疫学の融合を図り、わが国における感染免疫学の領域の確立にわずかながらも貢献できたのではないかと自負しております。

平成20年10月から2年間は医学研究科長・医学部長に加えて、同時に芝蘭会会長をも務めさせていただき、在任中には医学研究科人間健康科学系専攻の大学院の完成、iPS研究所や附属病院積貞棟の竣工などに立ち会うことができましたし、アジア地区医科系大学を代表して第1回World Health Summit in Berlinへも参加する機会を得ました。また、当時の清水孝雄東大医学研究科長、平野俊夫大阪大学医学研究科長と3人で、何度も文部科学省に足を運び、研究医養成のための定員枠増が認められるに至ったことが思い出されます。さらに各地の芝蘭会支部総会にお招きいただき、支部の先生方には同窓生のように温かく接していただいたことも忘れることはできません。

本年4月1日からは、京大に新設された大学院総合生存学館「思修館」の専任教員を仰せつかり、東大路を挟んだ医学部向かいの京大近衛館にて特定教授として勤務いたしております。ここでは、文系理系を超えた学際的国際人を教育し、国際機関における将来のリーダーとなるべき人材育成に微力を尽くしています。実験研究のラボからは離れることとなりましたが、これまでの京大勤務で得た経験と哲学を生かし、有能かつ多様な院生とともに自分もまたより一歩でも前進していきたいと念じております。

これまで頂戴しました芝蘭会会員の皆さまのご厚情に改めて感謝いたしますとともに、今後も変わらずご交誼くださいますようお願い申し上げます。

研究から創薬へ終わりなき旅

京都大学医学研究科特任教授　成宮　周

本年3月末をもちまして定年で京都大学医学研究科・医学部教授を退職しました。私が教授に就任したのは平成4年1月1日ですので、21年間皆さまにお世話になりました。この間、お寄せいただきましたご厚誼に厚く感謝いたします。

私が教授になったとき、中西重忠先生に「教授になってどうしたら良いでしょう」と聞いたところ、中西先生は「君は何を言っているんだ。教授会は君を信用して教授にしたのだから、君は自分の思うように仕事をしたら良いのだ」と申されました。私は中西先生のお言葉を胸に、これまで自由に自分の思うように研究させていただきました。京都大学医学部は良い意味で個人主義が徹底しており、よほどおかしなことをしない限り個人を尊重し自由に研究させてくれます。研究は個々人のものであり、京都大学医学部のこの特徴がサイエンスを育んできたと感じております。

私も良き先輩方に恵まれ、50歳前半まで大きな雑用もなく研究に専念させていただきました。お陰さまで、プロスタグランジン受容体と低分子量Gタンパク質Rhoという2つの領域で世界をdominateする研究ができたと自負しています。

先輩方からは50歳を過ぎたらボチボチと手伝ってもらうからと言われており、そのころから、基礎医学生物学の導入や各教科の集約化など基礎医学のカリキュラムを改訂したり、現在の生命科学系キャリアパス形成ユニットの前身である先端領域融合医学研究機構（HUMRO）を立ち上げたり、委員会を設けて産学連携活動の考え方の整理を行いました。

後者の活動は平成14年に京都大学医学領域産学連携機構の設置として実を結びました。さらに、平成15年には当時の本庶研究科長から、国立大学法人化を控えて、アクションプランを策定するように命じられ、今後の医学研究科・医学部の方向性を系統的に考える機会をいただきました。

北、藤井、鍋島、福島、湊、宮地、福原各教授と江崎事務長を加えたこの委員会は、ワインを飲みながらの楽しい委員会でしたが、翌年夏まで10回にわたって開かれ、助教授以下への任期制の導入、外部資金を用いた教員の雇用、サバティカル制度の導入、京都大学医学部基金の設立、基礎構内スペースの中央管理、現専攻の組換えによるDepartment形成、卒後研修後の大学院整備などを議論し、実施案を策定しました。

平成17年10月に私は研究科長に選出され医学部のお世話をすることになりましたが、研究科長として行ったことは、ほぼすべてこの委員会での議論が土台になっています。例えば、大学院教育の実質化を目的として、博士課程6専攻を医学専攻に一本化し、所属分野での実験、研究とともに、12の大学院コースで講座横断的にコース教育を受ける現在の大学院教育を整備しました。また、平成20～24年度に実施したGlobal COEプログラムでは、各領域での基礎医学と臨床医学の一体化を目指しました。現今の医学は広大で、ますます、expandしており、基礎と臨床の垣根はどんどん低くなっています。この状況下での研究は専門分野での深い学識、技術と医学全体に対する広範な理解が必要と考えます。これらはこれを意図して行ったものです。

しかし、現在の日本の大学は、何もしなくても国が保護してくれるところではなくなっており、京都大学も例外ではありません。自立自存のため、さまざまなアイデアを考え実行に移すことが求められており、それがあってこそ国も援助してくれます。大学の使命を忘れることなく、自己資金を拡充し、その中で医学の推進と人材育成を行うことが求められています。このモデルとして、私が研究科長のときにスタートさせたのが、アステラス製薬と京都大学の協働事業であるAKプロジェクトです。ここでは製薬会社と国のマッチングファンドで多数の若手研究者が雇用され、個々が独立した研究者として研究にいそしみ、その成果を創薬に結びつけるべく努力しています。また、AKプロジェクトをモデルに他の製薬会社の賛同を得て設立されたのがメディカルイノベーションセンターです。ここでは、武田薬品株式会社、大日本住友製薬株式会社、田辺三菱製薬株式会社、塩野義製薬株式会社との協働事業が各々別のテーマで走っております。これらは、アカデミアと企業が連携するオープンイノベーションの場です。いずれも企業や国から多額の資金が投入されており、その帰趨が今後の日本でのイノベーションの在り方に影響を及ぼすものと考えます。

私は、定年後も、医学研究科の特任教授としてこれらプロジェクトの執行、調整にあたることになりました。この形で定年後も研究科に残していただいたことに教授会にお礼申し上げたいと思います。一方、これは、やはりはじめたことにちゃんと責任をとれというご指示でもあると思います。ここに集まった若い人たちに優れたサイエンスを創造してもらい、その結果を優れた薬物の創造に結びつけること、私はそのために全力を尽くす所存です。ただ、これは、私を含むプロジェクトの人間だけでできるわけはなく、皆さまのご理解とご協力が必要です。今後ともご指導、ご鞭撻をたまわりますようお願い申し上げ、ごあいさつといたします。

よりよい医学部生教育に意欲

京都大学国際高等教育院教授　武藤　誠

本年3月末日をもって医学研究科教授を退職いたしました。

私は本学部、本研究科を卒業しましたが、その後長年米国に滞在し、帰国後も企業研究所や他大学に奉職したため、母校での勤務は退職までの12年にとどまっています。

それでも、私の人生で最も長い在職年数を京大で送ったことになります。この間、教授会の先生方、事務の方々、そして芝蘭会会員の皆さまには格別のご支援をいただいたことに改めてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

この12年間、教育面では遺伝薬理学教室の主任として、学部学生の教育に携わり、大学院生の研究指導に従事し、教室員とともにマウスモデルを用いた大腸がんの研究を進めました。

食餌の西洋化により日本における大腸がん発症率は増加しており、女性ではがん死亡率第1位となっており、男性でも近いうちに胃がんや肺がんを超えると予測されます。がん研究は工業国では既に何十年間も重要研究課題とされ、多額の研究費がつぎ込まれてきました。

その間、正常組織のがん化に伴う遺伝子変異やエピジェネティックな諸変化など、多くの知識が蓄積されましたが、固形がんの基本的治療法にはここ数十年根本的な進歩はなく、原発巣の外科切除と化学療法や放射線療法の段階的改善で、延命を図ってきたにすぎません。

私が最終講義で最も恐れていた質問は、「先生、それで私の転移性大腸がんを完治していただけるのですか?」という患者さんの声がでることでした。残念ながら、それはいまだできていないのです。しかし、少しはそのゴールに近づいたと思える研究成果を、近年自分たちの手でつかみつつあると実感しており、今後もなんとかこの研究を続けたいと静かな意欲を燃やしています。

本年4月からは、京都大学に新設されました国際高等教育院の教授として、教養教育、共通基礎教育、語学教育の改善に向けて各学部・大学院から選ばれた約20名の教授の方々と日夜議論を続けております。

私の立場は京大全体としての上記教育の改善を進めることと、医学部教授会の代表としてどのような教育を医学部生に施すかという2つの任務を果たすことです。多くの分散した意見を集約して来年4月入学の学生から、新制度での教育を始めるためには困難が予想されますが、医学部教授会の先生方をはじめ、退職後の諸先生や医療現場の芝蘭会会員の皆さまにもご協力をお願いして、よりよい教育を構築したいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、芝蘭会会員の皆さまのご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引落し」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にも繋がります。
ぜひ、ご利用いただきたくお願い申しあげます。

手続き等については、**芝蘭会事務局**（TEL 075-751-2713）までお問い合わせください。

退任あいさつ

過去を思い未来に生きる

京都大学研究員　芹川　忠夫

平成25年3月31日付で京都大学教授（医学研究科附属動物実験施設（実験動物学分野））を定年退職した。動物実験施設棟が建築途上にあった昭和48年10月に動物実験施設の助手として採用された後、昭和63年1月に助教授、平成5年9月に教授、そして平成6年4月以降、附属動物実験施設長を併任してきた。平成15年7月から利用を開始した増改築後の動物実験施設棟は、当初の建物の約1・5倍の広さ（延床面積9400平方メートル）があり、実験動物の飼育環境と動物実験の設備が整えられている。昔の「動物小屋」と呼ぶような建物ではない。医学生物学における基礎研究や臨床応用への架け橋となる動物実験は、今後も大きな意義をもって継続されるものと思われる。この動物実験施設を大いに活用して優れた成果が得られることを願っている。動物実験施設の管理に関する歴史は、動物実験施設報の第10号に、「附属動物実験施設の運営40年」と題して綴らせていただいた。私にとっては、あまりにも日常的であるので、大きな負担であるとは思っていないつもりではいたのだが、収容動物と利用者の命を預かる長年の職務から解放されて、やはり安堵の感は大きい。

実験動物学分野の教員・研究者としての活動は、じっくり時間があって大変楽しかった。実験動物の感染症研究、ラットの遺伝子地図作製からゲノムシークエンスへの研究、てんかんモデルラットなどの疾患モデルの開発解析応用研究、そしてラットのバイオリソース事業の立ち上げと運営などを幅広く行うことができた。これは、優れた共同研究者、スタッフ、学生に恵まれたお蔭であると感謝している。そして、10年くらいの単位で、明確な戦略をもってプロジェクトを展開すれば、何でもできると思わせていただいたことは大変幸運であった。

この4月からは、京都大学研究員（産官学連携）として欧州ラット研究プロジェクト（European large-scale functional genomics in the rat for translational research, EURATRANS）に携わっている。本プロジェクトは、欧州委員会の大型共同研究プログラムFP7に採択されたもので、ヒトの諸疾患の病態解明、予防、治療に向けて、モデルラットのゲノム機能の全容を明らかにすることを目的としている。EU諸国の17の研究機関と米国と日本（京都大学、代表研究者：芹川）のそれぞれ1研究機関が参画している。限られた環境の中ではあるが、この魅力的なプロジェクトに貢献したいと思っている。末筆ながら、ご指導ご鞭撻をいただいた諸先生方、関係各位に深くお礼を申し上げる。

10年の区切り迎え本当に幸運

京大病院医療情報企画部教授　吉原　博幸

2002年も押し迫った12月末の夜8時ごろ、熊本大学病院のオフィスに「京都大学の本庶です。医療情報部教授の最終選考であなたが選ばれました」との電話。想定外の話に「病院長、学部長の了承を得た上で、明朝ご返事を差し上げます」と申し上げるのが精一杯でした。

当時、熊本大学教授（医療情報経営企画部）として、熊本大学病院の情報システム、経営システムの改革に取り組んでおり、まだ3年目。病院長、学部長にすぐさま電話で相談しました。意外にも「すでに十分な結果を出しているし、先生の仕事の発展のためにも大変良いことなので」と快諾していただきました。ただし、少なくとも1年は兼任してほしいということで、2003年4月から1年半、週のうち半分を熊本に出向くことになりました。

宮崎医大時代の恩師（木下和夫第5代学長、脳外科）が定年退官後熊本に住んでおられたので、京大への異動の報告に行ったところ、家系図を出してきて「この曾祖父（木下廣次）が京大の初代総長。総長室に直筆の書（自重自敬）がかかっているからぜひ見に行きなさい」と大変喜んでいただきました。

京大に着任した2003年4月、本庶先生、田中紘一先生、当時医療情報部長代理を務めておられた内山先生にごあいさつし、その後、図々しくも総長室を訪問。当時の長尾総長は、突然の面会依頼にも快くご対応いただき、情報学研究科創設の中心人物でもあったので、医療情報の話で1時間近く話が弾みました。木下廣次先生の書は確かに総長室に飾ってあり、後日、熊本の木下和夫先生にご報告したことを思い出します。

京大での仕事は本当に大変でしたが、刺激的で楽しいものでした。着任後直ちに、電子カルテの導入と安定稼働、院内2次利用データベースの整備、地域連携医療システムの設立と運用、大学病院を中心とした多施設臨床データベースの構築、などの目標を立てました。

電子カルテは2005年に導入し順調に稼働。2011年には最新世代へのアップデートを完了。地域連携医療システム（まいこネット）は2006年に稼働。

2011年には府立医大も参加し、診療情報開示サービスを受けている患者さんは3000人を超え、2007年以後の京大病院患者の全ての遠隔バックアップ（札幌）も完了。臨床データを集積した多施設臨床データベースは、2005年に7大学病院で開始、現在14施設に達し、ユニーク患者数250万人、延べ3900万人のデータベースが構築されています。2年前からこれに検体検査データの追加を始めています。

当初の目標をほぼ達成し、10年という区切りを迎えて退任できたことは本当に幸運でした。

京大医学部の特徴は、人事に大変厳しく、人を客観的、多面的に評価する風土があり、大変フェアだと感じます。自由の気風の元、京都大学医学部、京大病院の、ますますの発展を祈念します。

事業計画などを審議する芝蘭会評議員会および理事会の出席者

事業計画など5議案承認

芝蘭会評議員会・理事会

平成25年3月30日（土）午後3時から芝蘭会館別館において芝蘭会評議員会および理事会が開催された。

議案は、(1)平成25年度事業計画及び収支予算について、(2)京都大学医学部記念講堂・歴史資料館の募金状況について、(3)理事の選任方法について、(4)芝蘭会館別館の運営状況について、(5)その他についての5件だった。

議案(1)については、山田事務局長及び寺西産学情報交流部長より説明が行われ、審議の後、原案どおり承認された。

議案(2)についても、山田事務局長から募金状況について説明が行われ、審議の後、原案どおり承認された。

議案(3)については、理事の中安顕氏より理事の選任方法について、提案と説明が行われ、審議の結果、芝蘭会事務局にて選任方法に関する具体案を作成し、次回の評議員会、理事会にて審議することが異議なく承認された。

議案(4)については、山田事務局長より芝蘭会館別館の運営状況（門限の撤廃、設備の改修、営業活動）について説明が行われ、審議の結果、異議なく承認された。

議案(5)については、2件の議案があり、1件目は京大病院の入院患者の付添者用の宿泊提供について、山田事務局長より平成24年7月から平成25年3月までの京大病院の入院患者の付添者用の宿泊利用状況について説明が行われ、審議の後、異議なく承認された。

2件目は総会の開催について、会長より平成24年度の決算書並びに事業報告を審議するための総会を平成25年6月15日（土）に開催することが諮られ、異議なく承認された。

議案の審議終了後、寺西産学情報交流部長より「京都大学医学研究科・医学部 産学連携活動の10年の歩み（2002～2011）」について説明と報告が行われ、また、湊会長から「京都大学医学部教育研究支援基金（KMS-FUND）」の寄附申込状況について報告があり、了承された。

「京都大学医学部記念講堂・歴史資料館基金」募金の現状

平成25年5月31日（金）現在

・「三井住友銀行」利用のご寄附
233人（法人を含む）
46,550,000円
うち、50万円以上のご寄附は44人（法人を含む）

・「ゆうちょ銀行」利用のご寄附168人
3,722,000円
うち、50万円以上のご寄附は1人

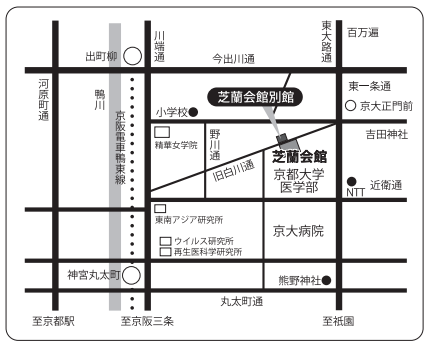
計401人（法人を含む）
50,272,000円

芝蘭会館がご利用いただけます

学会やシンポジウムへのご出席はじめ、同窓会などのお集まりや、京都観光のご宿泊に、芝蘭会館別館［国際交流会館］をご利用ください。

一般社団法人 芝蘭会（しらんかい）
芝蘭会館別館
〒606-8302　京都市左京区吉田牛の宮町 11-1
Tel. 075-771-0958　Fax. 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

レストラン［しらん］　Tel. 075-752-1027



芝蘭会館別館へのアクセス
■京都駅から
●D2 乗場　市バス 206 系統「東山通北大路バスターミナル」行「京大正門前」下車徒歩 2 分
●地下鉄「国際会館」行「今出川」下車出口 3 番、市バス 201 系統「百万遍・祇園」行乗換「京大正門前」下車徒歩 2 分
■阪急河原町駅から
●出口 6 番　市バス 201 系統「百万遍・祇園」行、31 系「統熊野・岩倉」行「京大正門前」下車徒歩 2 分
■京阪出町柳駅から　徒歩 15 分

客室ご利用料金（税込）

シングル	（18 室）	定員 1	6,800 円
ツイン	（3 室）	定員 2	12,700 円（シングルユース 10,400 円）
デラックスツイン	（1 室）	定員 2	15,000 円（シングルユース 12,700 円）

●宿泊室（全室洋室）は、バス、トイレ、テレビ、冷蔵庫、インターネットジャック付きです。
●芝蘭会会員（会費納付者）は宿泊利用料金を、1,000 円割引させていただきます。
●チェックインタイムは午後 3 時、チェックアウトタイムは午前10 時となっております。
●キャンセルについては、3 日前より宿泊利用料金の半額を請求させていただきます。

研修室・会議室ご利用料金（税込）

		ご利用時間 9:00～12:00	13:00～12:00	18:00～22:00	超過料金
研修室 1・2	定員 60 名	15,000 円	18,400 円	18,400 円	4,600 円
会議室 B1	定員 20 名	9,800 円	11,500 円	11,500 円	3,000 円
和　室 1・2	定員 10 名	6,300 円	8,000 円	8,000 円	2,300 円

70 回・2012（平成 24）年版
芝蘭会会員名簿 刊行！

名簿作成にご協力いただき、ありがとうございました。

このたび平成24年12月に芝蘭会会員名簿を刊行いたしました。名簿作成にあたり、会員の皆さまから快く異動情報をお寄せいただき感謝申し上げます。会員名簿をご希望の方は、芝蘭会事務局（075-751-2713）までお問い合わせください。

● 会員名簿：A4 判、890 頁
● 会員頒布代：一部 5,250 円（消費税を含む）
（但し、会費納入者に限る。 その他は 10,500 円）
● 送　　料：700 円

一般社団法人 芝蘭会

支部だより

2教授の講演、感銘深く

【東京】 平成24年度芝蘭会東京支部総会及び第11回京都大学健康科学フォーラムが平成25年1月19日（土）に千代田区の学士会館にて催されました。

総会では、まずは日野原重明先生のご挨拶があり、11人の物故者に対して黙祷が捧げられました。雪に見舞われ、例年に比べ参加者が少ないことは残念でしたが、実りのある会にしたいと抱負を語られました。

大高道也先生より平成24年度事業報告と平成25年度事業計画が、六反田亮先生より平成24年度会計報告が行われました。

二木隆先生より京都大学同窓会関東支部連絡会の設立の動きについて説明がありました。「同窓会活動の歴史が長く法人化されている芝蘭会が、軸となってリードしていかざるをえない」との方針が承認されました。併せて、今後、京都大学健康科学フォーラムも、家族などの同伴者や他学部の代表の方々の参加にも門戸を広げていくことが承認されました。

次に芝蘭会本部代表（会長代理）の柳田素子先生より本部及び京都大学の近況運営についてお話がありました。

第2部として、東京医科歯科大学分子代謝医学分野小川佳宏教授と京都大学腎臓内科柳田素子教授の講演による京都大学健康科学フォーラムが催されました。以下、ご講演の内容を紹介させていただきます。

・「メタボリックシンドロームと慢性炎症」（小川佳宏教授）

急性炎症が外来性非自己に対する自己の防御反応である一方で、慢性炎症は生活習慣病やがん、神経疾患、自己免疫疾患、動脈硬化などの外因・内因性ストレスへの応答であるとされており、その生理的炎症と生体恒常性を維持するための組織リモデリングを何度も繰り返し不可逆的変化に至ると考えられています。

メタボリックシンドロームでは、肥満に伴い血圧上昇、脂質代謝異常、糖質代謝異常が現れ動脈硬化に至ります。肥満では脂肪細胞が肥大し、マクロファージが浸潤して脂肪分解し、同時に産生された飽和脂肪酸によりさらにマクロファージの浸潤を誘導することで、脂肪分解と繊維化を繰り返し脂肪蓄積能が低下、それにより脂肪細胞に貯蓄できなくなった脂肪は他の臓器に異所性脂肪として蓄積されていきます。

非アルコール性肝炎NASHはその代表的なもので10～20％が肝硬変、肝細胞癌に進行していきます。先ほど述べたような脂肪細胞の繊維化及び肥大化不能に陥る過程で、遊離脂肪酸が増加し正常肝のNASH化が同時進行していくと考えられています。今後は、遊離脂肪酸を伝達に関わるホルモンやサイトカインとは別の、栄養シグナルという新しい見方が必要なのではないか、と述べられました。

・「京都大学腎臓内科設立一年を迎えて――何ができるようになったのか、これから何をめざすのか」（柳田素子教授）

勢ぞろいした東京支部総会の出席者

昨年11月に新設された腎臓内科について、まず紹介がありました。

以前の腎臓内科は腎生検や病理診断などが中心でしたが、今日では腎不全合併症の治療や院内発症腎不全、腎移植後の管理まで幅広く活躍しています。

腎臓病を治る病気にし、非透析患者と変わらない医療を提供するための取り組みについて話されました。

現在、日本における透析数は台湾に次いで世界第2位で世界の18％を占めています。その中で血液透析における死因の10％はがんに因るものであると言われています。透析患者は酸化ストレスといった慢性炎症の下にあるためがんにかかりやすいだけでなく、透析患者に対する抗がん剤などの化学療法が確立していないことが大きな理由と考えられます。明確な基準や奏効保障がなく副作用、薬物相互作用、無効化が懸念されるため透析中であることを理由に化学療法を回避されている現状があります。透析患者に対し適正ながん治療を提供し予後を改善するために、①がん治療中の腎不全の防ぎ方②腎不全透析患者への化学療法をどう行うか、について今後、より一層研究がおこなわれ標準治療の早期確立が求められます。

最後に現在の研究について紹介されました。

慢性腎臓病CKDが進行すると、その原因疾患によらず腎臓の線維化を来たし、線維化と共に回復や再生は困難になります。腎の線維化に関する知見は他臓器と比べて不十分であり、腎臓病の治療法を確立する上でCKDが可逆的変化なのか、不可逆的変化なのか考える必要があります。

腎臓はエリスロポエチンEPOを産生し、EPO産生細胞は近位尿細管周囲の間質に存在しています。CKDでは線維化が起こり、EPO産生能は低下し腎性貧血に陥るため、従来EPO製剤を長期に渡って投与されてきました。これは患者にとっても医療経済にとっても非常に大きな問題であり、内因性のEPO産生能を回復させるために何か方法はないかと模索されてきました。

2011年、柳田先生の研究チームが、腎臓に存在する線維芽細胞のほぼ全てが神経堤由来細胞であること、この神経堤由来の線維芽細胞が、EPO産生細胞であると同時に、腎臓病では悪玉細胞に形質転換して線維化を担う細胞であることを発見されました。

また、線維芽細胞が悪玉細胞化する過程でのEPO産生能低下が腎性貧血の原因であり、低下したEPO産生能は少量dexamethasoneやneurotrophinによって回復可能であること、さらにはエストロゲン受容体調節薬であるタモキシフェンを投与することによって、腎性貧血だけでなく線維化をも回復させることが可能であることも発見されました。

この研究から、腎の線維芽細胞に対する治療法は、腎性貧血と腎の線維化を同時に治療できることが期待され、現在抗繊維化の機序を調べつつ有効な薬剤開発に向けて研究をされています。

両講演後は多くの先生方から質問がなされて、より深みを増した講演会となりました。

懇親会前に日野原先生よりフォーラムの総括として小川先生、柳田先生二人の感銘深いご講演を称えられ、今回の健康科学フォーラムの成功を祝されました。続いて、国立がんセンター名誉総長の寺田雅昭先生のご発声により懇親会が催されました。

懇親会中、初めて、もしくは久方ぶりに参加された先生方の自己紹介や近況報告がなされました。医療だけでなく国際交流の場で活動してこられた先生、教養を深めようと大学で勉強を始められた先生などご活動も多彩で、京都大学は非常に個性的な先輩が多い大学であると改めて感じました。

一年ぶりの懇親会は大いに盛り上がりましたが、瞬く間に時間が過ぎ、惜しまれつつも二木先生の一本締めにて平成24年度総会及び第11回京都大学健康科学フォーラムはお開きとなりました。

昨年に引き続き今年もこのような貴重な機会に参加させていただき深く感謝申し上げるとともに、今後の芝蘭会東京支部及び同フォーラムの発展とより多くの芝蘭会会員の先生方のご参加を願って、芝蘭会東京支部総会の記事とさせていただきます。

（文責：5回生　柳井谷駿史）

剣道部の活動に参加した筆者（中央）

マイコースプログラム海外留学レポート

米オハイオ州の大学

5回生 梅宮　まき

剣道でふれあい 充実感

「経験を次につなげたい」

2012年8月17日から10月19日まで、放射線遺伝学武田先生のご紹介で、アメリカオハイオ州Division of Hematology/Oncology, Department of Medicine, Case Western Reserve University の松山先生の研究室で勉強させていただきました。研究室でのワーキングタイム外のことを主に書きます。

寝泊まりしたのは実験助手Justineの家です。彼女はボーイフレンドと二人で、大学からバイクで30分くらいの家に住んでいました。毎週末車でスーパーへ連れて行ってくれて、私はそこで1週間分の食料を30ドル分くらい買いました。

先生が安全とおっしゃる区域以外には行かなかったので行動範囲は非常に狭く、観光はほぼクリーブランド内でした。休日には、家の隣のJohn Carrol University の図書館で勉強したり散歩したりしていました。他には米空軍の年に一度のair show、大学構内にある有名なCleveland Orchestraなどが楽しかった休日の思い出です。

また、全く想像もしていなかったことに、私に剣道の経験があり、松山先生が剣道部の顧問をなさっていたご縁から、剣道部の活動に参加させていただきました。練習や新歓パーティーや出稽古、さらにはCaseの学生に扮して試合にも出させていただきました。

剣道を通して多くの人とふれあうことにはとても充実感がありました。

アメリカの大学生が4年間かけて自分の進む道を決めるということに憧れを感じた一方で、日本人ポスドクの方が、大学生のころは研究や留学なんて一度も考えなかった、人との縁で進みたい道が急に変わることもあるんだよと話してくださり、なるほどと納得しました。

最後に、この留学で特にお世話になったJustineと松山先生のことを書きたいと思います。家では姉のような存在でありラボでは先生だったJustineは、shy（quiet）（と言われた）な私をいつも気遣ってくれました。自分と年も違わないのに、迷いがなく自分を繕わない彼女の姿から多くのことを学びました。松山先生は家族の一員のように私のことを大切にしてくださり、何より科学者としての熱い思いを自分のような学生に話し聞かせてくださったことは大変貴重な経験でした。

留学から日にちが経つにつれて、この2カ月が自分にとってどんどん大きな意味を持つように感じています。お世話になった方たちへの感謝の気持ちを忘れず、この経験を次につなげられるようにこれからもがんばりたいと思います。

【ご注意】

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会 事務局
TEL：075-751-2713
FAX：075-752-4015

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金（KMS・FUND）だより

事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学部学生会館内
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.med.kyoto-u.ac.jp

学生の向学心 大切に

設立６年 さらなる支援願う

KMS・FUND委員
大学院医学研究科遺伝医学講座分子遺伝学分野教授
篠原　隆司

成宮・中尾教授のご努力でKMS・FUNDが設立されてからちょうど6年経過しました。本ファンドは大学の法人化後、国からの支援に頼らない形での京都大学医学部の教育と研究を支援する趣旨で設立されたものです。まだ完全な形ではないものの、現在では当初の目標であった学生会館が平成22年にオープンし、夜遅くまで語りあう学生の姿も今は目にする毎日です。このような施設をもつ京都大学はうらやましいという声も他大学の学生から聞こえてきます。

また、平成20年度から始まった医学部若手研究者優秀論文賞KMYIAについても現在では順調にその受賞者の数を伸ばし、今年度からは副賞の額を20万円と増額することにしました。

その一方で、まだまだ十分な活動ができていない部分もあります。例えば、独自の奨学金制度の創設や国際交流についてはまだ手が付けられていない状況ですし、学生の研究・学習資料の充実などは、ある程度芝蘭会からのサポートがあるものの、まだまだ充実したものとは言えません。もちろん、学生が必要とするものは多岐に及び、これをすべてそろえることがこのファンドの趣旨ではありませんが、私ができるだけ大切にしていきたいのは、学生の「向学心」です。学生さんには、若く多感な6年間の在学期間にこの伝統ある大学から自分は何を学びたいかしっかりと自問自答していただきたい。情熱に燃える若者と共に学び、伸びる意欲を持つ学生の能力を引き出すことが教員の重要な役割であると私は考えています。このファンドをきっかけにして、京都大学における自由闊達な勉学、研究の場とは何か、そのためには何が今必要なのかを学生と教員との間で議論していくことは、ひいては世界に羽ばたく医師、研究者を一人でも多く作るのに重要なプロセスであり、この学びの場の価値をさらに高めていくものでありましょう。

この3月をもち、KMS-FUNDをスタートした成宮、中尾教授は退任され、このファンドが始まったときに入学した最初の学生たちも卒業していきました。

今年はその意味でKMS-FUNDにとっては区切りの年になります。KMS-FUNDの現在の申し込み総額は2億9千万円であり、当初の目標の10億円にはまだまだ届いておりませんが、これまでの活動に加えて、目に見える形でこのファンドを学生の教育や研究に生かしていくためにも、関係者一同さらに努力していく所存であります。

芝蘭会の先生方に紙面をお借りしてさらなるご支援をお願いする次第です。

和やかな雰囲気の入学祝賀会の会場前

盛大に 和やかに 卒業・入学祝賀会

校友会主催

盛大に開かれた卒業祝賀会

平成24年度京都大学卒業式は3月26日（火）京都市勧業館みやこめっせで挙行された後、医学部学士号授与式が芝蘭会館本館・稲盛ホールで行われた。それに引き続き、山内ホールにて校友会主催の「卒業祝賀会」が開催された。

参加者は、医学研究科医学部長湊教授をはじめ教授14人、卒業生101人中97人、父母など関係者104人、計215人を数えた、盛大で和やかな祝賀会となった。

また、4月5日（金）京都市勧業館みやこめっせで、平成25年度京都大学入学式が挙行された。その後、芝蘭会館本館・山内ホールで、校友会主催の「入学祝賀会」が開催された。

湊教授からの祝辞、KMS-FUND委員長篠原教授によるKMS・FUND、校友会の説明の後、土井赳校友会会長からのあいさつおよび乾杯の発声で祝賀会が始まった。新入生112人、父母など関係者141人を含む260人を超える出席者で大変にぎやかで、和やかな雰囲気の祝賀会となった。京都大学医学部教育研究支援基金（KMS-FUND）委員長・金子武嗣教授の閉会の辞で終了した。

入学祝賀会で閉会の辞を述べる
金子武嗣 KMS-FUND 委員長

使命の重さを実感

卒業生代表あいさつ

卒業生を代表してあいさつする山城春菜さん

本日は、私たち卒業生のためにこのような盛大な会を開いていただき、誠にありがとうございます。また、ご多忙のところご出席いただきました教授の先生方には厚くお礼申し上げます。先ほど、先生方からの温かいご祝辞と、激励の言葉をいただき、私たちに寄せられる期待と、与えられた使命の重さを実感し、身の引き締まる思いでございます。

この6年間を振り返りますと、入学した日がつい昨日のことのように思い出されるほど、本当にあっという間で濃密な学生生活でした。勉強、アルバイト、部活やサークル活動、研究室や留学など、熱意を注いだ対象はそれぞれ異なりますが、それらを通して得た数多くの『出会い』が私たちの最も大きな財産になっていると考えています。

私の場合は、硬式テニス部と茶道部に所属しておりました。部活動を通し、意見の違いで他人と衝突することもありましたが、楽しい経験も苦しい経験もたくさん共有し、いろいろなことを語り合って築いてきた関係は今後の人生の糧になると思います。また、部活動の枠を超えた友人も、皆個性豊かで、自分自身の目標に向かって力強く突き進んでおり、そうした学友に囲まれて過ごした6年間はとても刺激的でした。自分にはないさまざまな考え方やものの見方を学ばせてもらいましたし、自分が悩んだときや辛いときに声をかけてくれる友人の存在は非常に温かく大きなものでした。

学業の面では、マイコースプログラムを含む研究生活や、5回生からの病院実習、また日常の学習環境に関することまで、先生方は私たち学生のやりたいと思うことを尊重し、何ごとにもチャレンジする機会を与えてくださいました。また、進路に悩んだときには親身に相談にのってくださり、的確な助言を与えてくださったことには大変助けられました。京大は自由な校風とよく言われますが、自ら学習する課題を見つけ出し、解決していく主体性を重視してくださる環境は実に恵まれていたと実感し、感謝しております。卒業後も、この自ら学ぶ姿勢を忘れないようにしたいと思います。

私たち卒業生は、この春から進んでいく道は一人ひとり異なりますが、京都大学で過ごしたこの6年間は各々の未来を切り開く力になっていくと考えております。この先、困難なことに出合っても、京都大学で得た経験を生かして乗り越えていけると思います。そして、常に向上心や探究心を忘れず、医学・医療の発展に少しでも貢献し、世界にも発信していけるよう、日々精進して参ります。しかし、まだまだ未熟な私どもではございますので、卒業した後も、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、今までご指導くださった諸先生方とお世話してくださった職員の皆さまに改めて御礼を申し上げます。また、大学卒業を迎えた今日まで、いつも変わらない愛情を持って温かく見守り支えてくれた両親や家族に心から感謝します。本当にありがとうございました。後輩の皆さまのご活躍と、京都大学医学部の一層の発展を願い、卒業生代表のあいさつとさせていただきます。

若手研究者優秀論文賞KMYIA受賞者の言葉

レプチンの有効性を示す

内分泌・代謝内科学
博士課程（医学専攻）
内藤　雅喜

このたび、KMYIAを受賞することができ、大変うれしく、そして誇りに思います。

現在、世界的に糖尿病患者が増加し続け、その合併症による健康被害が大きな問題であり、より効果的な新たな治療による疾病抑制が求められます。本研究は、インスリン分泌低下型の糖尿病に対して新たな治療の候補となるレプチンを用いて、多彩な作用により合併症の抑制、生存率の改善を示し、今後の臨床応用に向けての有効性を示したものです。

研究をする中で、教授をはじめグループの先生方、そして直接の指導教官といった多くの先生方の御指導をいただき、改めて感謝の意を表したいと思います。

現在の研究テーマも更に深め、引き続き結果を出せるよう努力を重ねていきたいと思います。

注目のCOPD研究推進

呼吸器内科学博士課程（医学専攻）
田辺　直也

このたびは、KMYIAに選考いただきありがとうございます。私は平成15年に京都大学を卒業した後に、内科全般、そして呼吸器内科の臨床研修を行いました。その後、大学院に進学し、呼吸器内科で現在大変注目されているCOPDに関する研究を続けてきました。今回の論文「Impact of Exacerbations on Emphysema Progression in Chronic Obstructive Pulmonary Disease（COPD増悪が気腫性病変の進行に与える影響）」では、COPD増悪が肺実質破壊を伴う気腫性病変の進行に関与することを、胸部CTを用いた2年間の前向き観察研究とコンピューターシミュレーションにより示すことができました。研究の企画段階から論文投稿まで、京都大学呼吸器内科の三嶋理晃教授の教授室にて、教授をはじめ平井豊博准教授や室繁郎講師に何度も直接ご指導いただきました。改めてお礼申し上げます。

今後も呼吸器疾患医療の向上に少しでも貢献できるよう努めていきたいと思います。

平成25年度
校友会総会・講演会のお知らせ

日時　平成25年9月21日(土)13:00～
会場　芝蘭会館 本館

特別講演
尾池和夫・京都造形芸術大学学長
（前京都大学総長）

人事異動

発令年月日	氏名		異動内容
H25.3.15	樋之津 史郎	辞任	健康解析学薬剤疫学准教授より 岡山大学病院准教授へ
H25.3.16	樋口 ゆり子	採用	薬学研究科特定助教より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定講師へ
H25.3.16	ALTMANN, Chiristian Friedrich	採用	医学研究科助教より健康長寿社会の総合医療開発 ユニット特定講師へ
H25.3.31	深尾 憲二朗	辞任	精神医学講師より 帝塚山学院大学教授へ
H25.3.31	佐藤　幸保	辞任	婦人科学・産科学講師より 大津赤十字病院医師へ
H25.3.31	杉江　知治	辞任	乳腺外科学准教授より 関西医科大学教授へ
H25.3.31	小濵　和貴	辞任	消化管外科学講師より 京都市立病院医師へ
H25.3.31	藤村　和磨	辞任	口腔外科学准教授より 兵庫県立塚口病院歯科口腔外科部長へ
H25.3.31	大久保 和俊	辞任	泌尿器科学講師より 大阪赤十字病院医師へ
H25.3.31	原田　浩	辞任	学術融合教育研究推進センター講師より 京大病院放射線治療科特定准教授へ
H25.3.31	中嶋　善明	辞任	生体情報科学准教授より みささぎ病院医長へ
H25.3.31	沼部　博直	辞任	健康管理学医療倫理学准教授より 東京医科大学非常勤講師へ
H25.3.31	山本　洋介	辞任	健康解析学医療疫学特定講師より 京大病院臨床研究総合センター特定講師へ
H25.3.31	杉本　昌弘	辞任	メディカルイノベーションセンターＤＳＫ 特定講師より慶応義塾大学特任准教授へ
H25.3.31	西村　貴文	辞任	寄附講座（探索臨床腫瘍学講座）特定講師より 北野病院腫瘍内科部長へ
H25.3.31	廣田　喜一	辞任	手術部准教授より 関西医科大学医学部へ
H25.3.31	手良向　聡	辞任	探索医療センター准教授より 金沢大学附属病院先端医療開発センター特任教授へ
H25.3.31	桂　敏也	辞任	薬剤部准教授より 立命館大学薬学部教授へ
H25.3.31	伊藤　順子	定年退職	検査部講師より
H25.3.31	中尾　一和	定年退職	内分泌・代謝内科学教授より 医学研究科研究員へ
H25.3.31	成宮　周	定年退職	神経・細胞薬理学教授より 医学研究科メディカルイノベーションセンター長へ
H25.3.31	光山　正雄	定年退職	微生物感染症学教授より 京大総合生存学思修館特定教授へ
H25.3.31	武藤　誠	定年退職	遺伝薬理学教授より 京大国際高等教育院教授へ
H25.3.31	芹川　忠夫	定年退職	動物実験施設教授より 医学研究科研究員へ
H25.3.31	吉原　博幸	定年退職	医療情報企画部より 京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻 EHR 共同研究講座へ
H25.4.1	井上　貴博	採用	枚方病院助教より 泌尿器科学講師へ
H25.4.1	山口　昭彦	採用	長浜病院責任部長より 口腔外科学講師へ
H25.4.1	高橋　克	昇任	口腔外科学講師より 同准教授へ

発令年月日	氏名		異動内容
H25.4.1	中村　和弘	採用	キャリアパス特定助教より 学術融合教育研究推進センター講師へ
H25.4.1	石北　央	採用	キャリアパス特定助教より 学術融合教育研究推進センター講師へ
H25.4.1	和田　敬仁	採用	神奈川県立こども医療センター医長より 健康管理学医療倫理学准教授へ
H25.4.1	日下部　徹	採用	京大病院助教より メディカルイノベーションセンターＴＫ特定准教授へ
H25.4.1	淺沼　克彦	採用	順天堂大学助教より メディカルイノベーションセンターＴＭＫ特定准教授へ
H25.4.1	平野　恭敬	採用	東京都医学総合研究所主任研究員より メディカルイノベーションセンターＳＫ特定准教授へ
H25.4.1	三宅　秀彦	採用	葛飾赤十字病院第一産科部長より 医の倫理委員会事務局特定准教授へ
H25.4.1	高折　恭一	採用	肝胆膵・移植外科学講師より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定准教授へ
H25.4.1	堀部　智久	昇任	健康解析学薬剤疫学特定助教より 同特定講師へ
H25.4.1	日笠 幸一郎	昇任	ゲノム医学センター特定助教より 同特定講師へ
H25.4.1	石井 加代子	昇任	健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定准教授より 同特定教授へ
H25.4.16	楯谷　一郎	採用	京大病院助教より 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講師へ
H25.4.16	伊藤　和史	採用	中津病院臨床教育部長より 医学教育推進センター特定准教授へ
H25.4.16	角山　正博	昇任	麻酔科学講師より 京大病院手術部准教授へ
H25.4.16	増田　智先	昇任	薬剤部講師より 同准教授へ
H25.4.30	角谷　寛	辞任	ゲノム医学センター疾患ゲノム疫学准教授より 滋賀医科大学特任教授へ
H25.5.1	赤木　忠道	採用	京大病院特定助教より 眼科学講師へ
H25.5.1	近藤　英治	採用	京大病院助教より 婦人科学・産科学講師へ
H25.5.1	田中　司朗	採用	健康解析学薬剤疫学特定講師より 同講師へ
H25.5.1	本田　直樹	採用	情報学研究科特定研究員より 基礎病態学病態生物医学特定准教授へ
H25.5.1	青木　一洋	採用	生命科学研究科講師より 基礎病態学病態生物医学特定准教授へ
H25.5.16	野口　倫生	採用	内分泌・代謝内科医員より 医学研究科メディカルイノベーションセンターＴＫ特定助教へ
H25.5.16	米澤　淳	昇任	薬剤部助教より 同講師へ
H25.5.31	北村　成史	辞職	健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定助教より 再生医科学研究所特定研究員へ
H25.6.1	安部 健太郎	採用	生命科学研究科助教より 生体情報科学講師へ
H25.6.1	原島　伸一	採用	糖尿病・栄養内科特定講師より 同講師へ
H25.6.1	山本　浩司	採用	整形外科特定講師より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定准教授へ
H25.6.1	河田　健二	昇任	消化管外科学助教より 同講師へ

会員訃報　（敬称略）　謹んでご冥福をお祈りいたします。

千頭　輝雄	（昭16年12月卒）	平成22年12月25日	ご逝去
松井　陽夫	（昭17年卒）	平成25年5月7日	ご逝去
荒井　悟	（昭20年専卒）	平成25年3月15日	ご逝去
世良　敏行	（昭21年卒）	平成25年2月24日	ご逝去
大桑　裕	（昭22年卒）	平成24年10月25日	ご逝去
都城　速男	（昭22年薬卒）	平成24年2月7日	ご逝去
津田　寛	（昭23年卒）	平成24年11月11日	ご逝去
布施　邦之	（昭24年卒）	平成25年3月26日	ご逝去
大屋　敏郎	（昭24年専卒）		ご逝去
外山　司郎	（昭25年専卒）	平成25年2月17日	ご逝去
原　正己	（昭25年専卒）	平成25年3月7日	ご逝去
堺　幹太	（昭26年卒）	平成25年3月22日	ご逝去
相模成一郎	（昭26年卒）	平成25年5月8日	ご逝去
市井　武	（昭26年薬卒）	平成24年10月24日	ご逝去
井上　隆夫	（昭26年薬卒）	平成25年2月7日	ご逝去
河野　通文	（昭26年薬卒）	平成24年11月9日	ご逝去
飯原　啓吾	（昭27年卒）	平成25年4月6日	ご逝去
恒松徳五郎	（昭27年卒）	平成25年5月12日	ご逝去
宇山　昌延	（昭31年卒）	平成23年4月27日	ご逝去
城戸　國利	（昭31年卒）	平成23年9月18日	ご逝去
高橋　真一	（昭31年卒）	平成21年11月18日	ご逝去
多田　敏明	（昭31年卒）	平成25年4月9日	ご逝去
渡辺　徹	（昭33年卒）	平成24年12月16日	ご逝去
川那辺次郎	（昭35年卒）	平成25年1月19日	ご逝去
森　寧男	（昭35年卒）	平成25年2月2日	ご逝去
増田　徹	（昭36年卒）	平成25年2月4日	ご逝去
池田　正毅	（昭37年卒）	平成25年6月6日	ご逝去
鳥井　弘通	（昭37年院卒）	平成10年8月9日	ご逝去
松田結美子	（昭39年卒）	平成25年6月8日	ご逝去
西　直樹	（平3年卒）	平成24年5月31日	ご逝去
岡　裕公	（教室会員 医化学）	平成25年4月19日	ご逝去
村尾　信逸	（教室会員 病理）	昭和57年7月8日	ご逝去
大杉　三郎	（教室会員 内科2）	平成25年4月8日	ご逝去
山澤　堉宏	（教室会員 内科3）	平成25年3月20日	ご逝去
加藤　直太	（教室会員 眼科）	平成24年12月17日	ご逝去
佐々木皓一	（教室会員 小児科）	平成25年3月24日	ご逝去
亀山　正邦	（教室会員 神経内科）	平成25年4月24日	ご逝去

芝蘭会報編集委員会
委員長　高折晃史
委　員　斎藤信雄、岩田征良、豊國伸哉、山田圭介、園部　誠、阿部　恵
芝蘭会雑誌部
顧　問　高折晃史
部　員　橋本健太郎、中村有輝、山田直生、前田峻宏、宗宮伸弥、柳井谷駿史（以上6回生）
畑野翔太郎（5回生）
真辺　諄、森山太陽、鶴田将史（以上4回生）
赤埴未宝、宮崎規晶、坂本　慧、大植啓史（以上3回生）
高屋龍生、西川裕太（以上2回生）
芝蘭会事務局
事務局長　山田　均
総務課長　秋山和美
管理課長　浜崎康博

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。

芝蘭会報 編集委員会

●事務局から●

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。
（FAX 075-752-4015）